九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

孫文の福岡訪問と九州大学の日中学術交流について

静永, 健
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1804154

出版情報：文學研究. 114, pp.1-15, 2017-03-17. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

孫文の福岡訪問と九州大学の日中学術交流について

静永　健

孫文（一八六六～一九二五）は、一九一三年（大正二年、中華民国二年）三月十九日、福岡に到り、創立まもない我が九州帝国大学医科大学（いまの九州大学医学部）を訪れている。彼は大学構内を参観し、講演を行うとともに、さらに記念として一幅の書を揮毫している。その「学道愛人（道を学び、人を愛す）」の扁額は、現在も福岡市東区箱崎にある九州大学附属図書館のエントランスホールに掲げられ、日々、我々九州大学の教員と学生たちとを見守り続けている。孫文の人柄を髣髴とさせる、じつに堂々たる筆致の書である。

孫文は、この一幅の書に、いったいどのようなメッセージを込めたのか。また、その時、彼自身の胸には、いったいどのような思いが去来していたのか。本日は、まずこのことを中心に話してゆきたい。[1]

今日、各地に残された孫文の書の中で、おそらく最も多く目にするものが「博愛」の二字である。[2] 広東省に生まれ、十三歳で母に従ってハワイに渡り、そこでの教育を受けて育った孫文にとって、[3]「博愛」の二字は、中国伝統の儒学思想と、キリスト教に基づく西洋の倫理思想（philanthropy）とを結ぶ、人類共通の徳目であり、目の前の相手がいったいどのような宗教を信じ、いかなる思想信条を持っていたとしても、互いに理解しあえる言葉として選ばれていたように考えられる。孫文は人々に「愛」を説き続けた革命家であった。果たして、この九州大学の扁額にも、「愛」の文字が見えるのである。

しかし、この扁額を目にする我々九州在住の日本人には、もう一人の革命家の名を容易に思い起こすことであ

ろう。それは西郷隆盛（一八二八～一八七七）である。西郷の遺墨として有名なものに「敬天愛人（天を敬い、人を愛す）」の四文字があるが、[4] おそらくこの時、孫文の胸中には、この九州の悲運の革命家のことが思い起こされていたに違いない。西郷の著書『南洲翁遺訓』の其二十四に云う、「道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は我も同一に愛したまう故、我を愛する心を以て人を愛する也」と。孫文の革命には、これを支えた多くの日本人がいたことが知られているが、[5] 中でもその中心的存在だったのが、宮崎滔天（一八七一～一九二二）である。彼の兄宮崎八郎（一八五一～一八七七）は、西南戦争において西郷軍に従い、戦死しており、この滔天こそが、孫文と西郷隆盛とを結ぶ重要な紐帯であったと考えられる。特に今回の孫文の訪日は、辛亥革命成功後はじめての来日であり、西郷隆盛への思いも、ひとしおであったであろう。ちなみに、この九州帝国大学訪問の翌日、孫文は列車で福岡から大牟田に向かい、荒尾にある宮崎滔天の実家を訪れている。九州大学扁額の「愛人（人を愛す）」の二字には、このように日本の革命家の姿をも重ね合わせて読み取るべきなのである。

さて、もう一つ、第三の考察として挙げられるのが孔子（前五五二～前四七九）の言行録『論語』である。その中の陽貨篇という一章に次のようなエピソードがある。

孔子が誇る十人の高弟（いわゆる孔門十哲）の一人に、子游（前五〇六～前四四三？）という若者がいた。彼が魯国の武城という小さな町の長官に採用されたので、ある日、孔子が彼の仕事ぶりを視察するために武城を訪れた。すると「弦歌の声（弦楽器の伴奏によるコーラス）」が聞こえてきた。子游は、自分が市長として赴任したまちに始めて学校を作り、人々に文字を教え、それを歌に唱わせて、社会の基本的なルールや道徳、またさまざまな生活上の知恵などを教えていたのである。それを見た孔子は「莞爾として笑い」（にっこりとほほえんで）、「鶏を割くのにいずくんぞ牛刀を用いんや」（小さなにわとりを割くのに、どうして牛を捌く大きな刀を用いる必

要があるのか）と言った。つまり、子游の始めた学校教育は、この小さな武城のまちには、いささか大袈裟に過ぎるのではないか、と揶揄したのである。

しかし、正直で賢い子游は、かつて孔子が彼らに語った言葉を用いて、冷静に次のように返答している。

「君子は、道を学べば則ち人を愛し、小人は、道を学べば則ち使い易し」

（すぐれた人物が道を学ぶ、つまり世の中の真理を学ぶと、人々への敬愛の気持ちが生まれ、一方、つまらぬ人物でも、道を学ぶと、社会のしくみを理解し、労働に従事させることができる）と。

だから、たとえ小さな田舎まちであっても、このような学校は必要なのだと、子游は返したのである。この立派な応答に孔子は、前言は戯れに言ったまでだと弁明している。九州大学の扁額「学道愛人」の四文字は、最終的にはこの『論語』陽貨篇に基づく言葉なのである。

孫文が訪れた大正時代の福岡は、いまだ人口十万人にも満たない小さな一地方都市であった。この「学道愛人」の四文字を揮毫した孫文の脳裏には、この福岡が『論語』に登場する魯国の小さな田舎まちと重なって映ったのかもしれない。しかし、孫文には決して福岡をさげすむ意は無く、この新しい大学の未来に大いなる期待を込めて、この書を贈ったのである。(6)

その一つは、彼が平素説くところの万人博愛の精神であり、もう一つは西郷隆盛の「敬天愛人」を生んだ九州の風土への畏敬。そしてさらにもう一つは、一九一一年、つまり辛亥革命と同じ年に誕生したこの新しい大学に「君子」として、社会に貢献する有為な人材を輩出する使命を期待したのである。(7) この扁額は、まさに九州大学創設以来百年の至宝と呼ぶに相応しいものなのである。

ところで、ここでもう一度、原典たる『論語』陽貨篇の本文に戻って、この言葉を選んだ孫文の胸の内を少し窺ってみたい。その本文には、『論語』の他の篇章にもしばしば見られるように「君子」と「小人」とが対比的

に述べられている。そして、ここでの「小人」は、「使い易い」（為政者に上手に使われる存在なのだ）と言う。これは、もしかすると、中華民国臨時大総統の地位を譲り、目下「籌辦全国鉄路全権」（中国に鉄道を敷設するための資金調達の大使）として来日している孫文本人を暗に投影するものかもしれない。数多くの『論語』の章の中で、この陽貨篇の一章は、子游という若い弟子が主人公であること、また「焉んぞ牛刀を用いん」という孔子の失言が記録されていることから、一般的に、このような揮毫に選ばれる章ではない。おそらく孫文の書としても、この九州大学の扁額が唯一のものであるだろう。しかし、そこには揮毫者孫文の屈折した心理がはたらいていたと考えてよい。もしも孫文がこの時、円満な成功者であったならば、間違いなくこの四文字を選ぶことは無かったに違いない。当時、孫文の胸中に去来していたものは、必ずしも日本の新しい大学の誕生を純粋に祝福しようとするものだけではなかったと考えられるのである。周知の通り、この日本公式訪問を終えて帰国した直後、孫文は袁世凱との新たな戦いに挑み、その数ヶ月後の八月には、再び日本に亡命者として密航してくることになるのである。世に第二革命といわれる出来事である。

さて、我が九州大学は、日本の国立大学の中でも、さらに旧帝国大学以来の長い歴史を持つ大学であるが、国内では首都東京から遠く離れ、必ずしも地理的には恵まれた条件には無い。しかも百年前の創設当初は、この福岡市は人口約九万五千人の小さな一地方都市に過ぎなかった。だが、それにも関わらず、大変幸運にも海外からの素晴らしい訪問者を次々に迎え、そのことが九州大学独自の自由な学風を形作っていると言える。約一百年の歴史を二つに分け、その前半五十年の中での最も誇らしい訪問者と言えば、この一九一三年の孫文に続き、一九二二年（大正十一年）十二月二十五日のアインシュタイン（Albert Einstein 一八七九～一九五五）の訪問があり、[8] 第三番目には一九五五年（昭和三十年）十二月十七日の郭沫若（一八九二～一九七八）の来訪[9]が挙げられ

る。これらは、そのそれぞれに幾つかの偶然が重なって実現したものであるが、この三人の来訪に共通して言えるのは、首都東京や、経済および日本伝統文化の中心地である関西地域とはちがい、ここ九州の場合は、人と人との直接的なつながりによって、その訪問が実現しているというところである。

アインシュタインの場合は、日本でその相対性理論を最初に理解した桑木彧雄（一八七八～一九四五）九州帝国大学工科大学（いまの九州大学工学部）教授や、日本における内臓外科手術の開拓者であった三宅速（一八六六～一九四五）九州帝国大学医科大学教授との親交があったことによるものであり、郭沫若においては、郭自身が一九一八年（大正七年）九月から一九二三年（大正十二年）三月まで九州帝国大学医科大学に学んでいたこと、しかも、そこでの恩師中山平次郎（一八七一～一九五六、医科大学教授・病理学）との出会いから、彼の考古学研究、そして更に中国古代史への関心が開眼したことが、戦後の再訪（しかも中国科学院訪日学術視察団団長としての公式訪問）につながったと言える。[10]

そして、再び孫文の一九一三年来訪に戻って考えると、これも、先に述べた宮崎滔天のほか、長崎の貿易商梅屋庄吉（一八六八～一九三四）や福岡の実業家安川敬一郎（一八四九～一九三四）らとの親密な交流があったからこそ実現したのである。

なお、ここで視点を変え、九州大学から中国への交流についても、その先駆的な二人の人物を少し紹介しておきたい。それは法文学部（いまの文学部）の初代中国文学講座主任教授であった目加田誠（一九〇四～一九九四）と、その畏友で、戦後、同じく九州大学教養部教授に迎えられた浜一衛（一九〇九～一九八四）である。二人は、一九三〇年代前半の北京に留学し、その当時北京に住んでいた多くの中国知識人たちと交流している。

浜一衛の北京留学中の最大の関心事は、当時の伝統的な京劇であり、他に類を見ない先駆的な著作『北平的中

国戯』（一九三六年、東京・秋豊園）と『支那芝居の話』（一九四四年、東京・弘文堂）を著したほか、今日ではまことに貴重な当時の中国伝統演劇に関するさまざまな第一級資料を収集し、これを九州大学附属図書館に「浜文庫」として残した功績はまことに大きなものがある。これら浜一衛の業績と、その収集資料の整理と分析は、現在、九州大学言語文化研究院の中里見敬教授を中心に精力的に進められており、[11] 近く大きな報告書にまとめられることであろう。

また、もう一人の目加田誠は、戦後日本の中国文学研究において、詩経や唐詩、また文芸思想史の面からさまざまにリードした先駆者の一人であるが、その方向性を確立したのが、一九三三年（昭和八年）十月から一九三五年（昭和十年）二月までの北京（当時は北平と称した）留学であった。目加田誠当時三〇歳。九州帝国大学助教授に着任して間もなくのことであった。

この目加田教授の北京留学がどのようなものであったのかについては、これまで目加田誠本人が晩年に発表した幾つかのエッセイによって、断片的に知られていたのだが、このたび目加田誠の旧蔵書やノート類が一括して自宅があった大野城市に寄贈され、その中から当時の自筆日記『北平日記』が発見されるに及んで、一挙に明らかになった。魯迅（一八八一～一九三六）の弟で作家の周作人（一八八五～一九六七）や、日本文学研究者で中国で初めて『万葉集』の漢訳に挑んだ銭稲孫[12]（一八八七～一九六六）らとの実に温かな交流が書き留められていたのである。例えば次のように（下の引用文中の括弧内は静永の補注）。

昭和九年（一九三四）九月二十五日…（昼間の記述は省略）…夜、西四（北京の地名）、同和居（北京の料理店名）にて宴会。東京研究所の人々、銭稲孫氏、周作人、楊樹達（一八八五～一九五六、中国言語学）、鄭頴孫（一八九三～一九五〇、古琴奏者）、傅惜華（一九〇七～一九七〇、中国戯曲研究）、徐鴻宝（一八八一～一九七一、書誌学者）、楊鍾羲（一八六五～一九四〇、『雪橋詩話』の著者）の長男（名は楊

懿涑、一九〇〇～一九六七、書誌学者）、其の他、及び橋川時雄（一八九四～一九八二、中国文学、北京・東方文化事業の代表）[13]、小竹武夫（一九〇五～一九八二、中国文学、このとき東方文化事業の職員）、高岡（この時の留学生仲間、未詳）等の諸氏。愉快なる会合なりき。

昭和九年十二月八日

朝、砂紙を買ひ来りてスケート靴を磨く。『小山詞』（中国宋代の詞集）を更に読む。午後…（中略）…銭稲孫氏に『紅楼夢』『儒林外史』中の語について聞くところあり。夕方、北海（北京市内の有名な公園）にゆく。周豊一（一九一二～一九九七、周作人の長男）、浜一衛、小川環樹（一九一〇～一九九三、中国文学、のち京都大学教授）諸君あり。ともにスケートをなす。三十分ばかり。夜、八道湾（北京の地名）の周君の家（すなわち周作人邸）に招ばれ、湯に入り、すき焼きを食ひ、日本酒をのみ、レコードをきく。「明烏」、「朝顔日記」（ともに当時の日本の流行歌）など。日本恋しくなる。

昭和十年（一九三五）一月二十三日

午前中、中国大学にゆき、残りのプリントを取る。床屋にゆく。夜、銭稲孫氏、周作人、徐祖正（一八九七～一九七八、日本近代文学）、朱自清（一八九八～一九四八、中国文学）と計り、我々留学生を招いてすき焼きの会を催さる。会するもの十五人、甚だ盛なりき。

以上、『北平日記』の中から興味深い三日間のみを例として挙げた。このように目加田誠の留学日記には、当時の留学生の北京での日常生活と、北京の知識人たちとの温かな交流のようすが、きわめて詳細に記録されているのである。

時代はすにで柳条湖事件（一九三一年九月十八日）と盧溝橋事件（一九三七年七月七日）のはざまにあり、日中関係も決して穏やかとは言えない情勢にあった。しかしそれにも関わらず、実は、それとは逆にむしろこのよ

うな社会情勢であるが故に、これら親日派知識人たち（のちに「漢奸」としてその多くが弾圧された）と北京に学ぶ留学生たちは、堅い信念と決意とをもって親密に交流していたのである。この貴重な留学記録は、現在、我が九州大学文学部中国文学研究室において、その全文を解読し、また必要な注釈をつけて出版する予定であり、また、同時にこれを中国語にも翻訳して、中国でも出版する計画が進行している。

中国の古い言葉に、「天の時、地の利、人の和」という。九州帝国大学、そして今日の九州大学は、一九一一年という激動期に誕生した大学であるために、特に日本と中国との関係については必ずしも天の祝福を十分には受けて来なかったように思われる。また、首都圏や関西の経済界からも遠いために、その地理的な恩恵も得るところが薄く、かつ、中国や韓国などの国境[14]に最も近いために、その時節ごとの政治や社会情勢の敏感な反応に翻弄され、その影響を直に受けやすかったように思われる。しかし、そのような状況下にあっても、九州大学のこれまでの学術交流は、ただひとえに、人と人との繋がりによって鞏固に守られ、支えられ続けたと言ってよい。

その「人の和」を説明する『孟子』（前三七二？～前二八九？）公孫丑下篇の原文には次のようにある。「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と。人々の親密な協力と調和こそが、天の時や地の利にまして、すべての物事を成就させる要諦なのである。私は信じる。政治的な思惑に左右されず、また経済的な打算に安易に流されることなく、ひたすらに学問に基づく清らかで美しい交流こそが、両国民の真の相互理解を促し、それを後世に向けて不朽のものとすることができる。一九一三年に孫文の訪問によって開始された中国との学術的なつながりは、その後一百年の間、この「学道愛人」の扁額の通り、我が九州大学に確かに大きな恩恵を与え続けてきたのである。

最後に、この九州大学に関わる、ある実現しなかった日中学術交流の秘話を紹介しておこう。それは先の周作人の兄である魯迅にまつわる事柄である。魯迅に私淑し、単身上海に渡って魯迅の教えを受けた日本人に増田渉

（一九〇三～一九七七）がいる。彼の回想録『魯迅の印象』（角川選書、一九七〇年増補版）二六二頁に、増田が魯迅に面会した一九三一年頃、九州大学の中国文学講座に欠員があることを伝え、魯迅に直接「九州大学の講師になって日本に来ないか」と尋ねたところ、「一年くらいなら行ってもいい」との返事を得、すぐさま増田自身が日本側に仲介の連絡をしたことが語られている。[15] それが何故実現しなかったのかについては、増田自身もそれ以上何も語っていないが、もしも、この魯迅の九州大学来講が実現していたならば、この九州大学も、またあるいは日本の学術界全体も、今よりもさらに大きく変化していたかもしれないと、夢想するものである。

注

（1）本稿は、二〇一六年（平成二十八年）十月三十一日（月曜）九州大学伊都キャンパス稲盛ホールで開催された孫文生誕一五〇周年記念カンファレンス「孫文の国際的な遺産と未来へのインスピレーション conference on Dr.Sun Yat-sen's International Legacy and Inspirations for the Future」での招待講演の原稿である。本稿執筆にあたって九州大学文書館および九州大学附属図書館において貴重な資料や写真の閲覧を許可されたことをここに鳴謝いたします。

（2）孫文の揮毫した「博愛」の墨蹟は、神戸市垂水区東舞子にある孫文記念館所蔵のものをはじめ、各地の所蔵家による複数の扁額が報告されている。パンフレット『孫文記念館―重要文化財・移情閣―』（財団法人孫中山記念会、二〇〇八年）および長崎中国交流史協会編『写真誌：孫文と長崎―辛亥革命一〇〇周年―』（長崎文献社、二〇一一年）等を参照。また熊本県荒尾市の宮崎兄弟資料館（宮崎滔天の生家）には「博愛行仁（博く愛し、仁を行う）」の扁額がある。

（3）孫文の経歴については、陳錫祺『孫中山年譜長編』（上下冊、中華書局、一九九一年）を参照。

（4）青山会館編『南洲先生遺墨集』（巧芸社、一九二六年）参照。

（5）孫文と日本との関係についての近年の新しい著作としては、久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』（汲古書院、二〇一一年）、嵯峨隆『アジア主義と近代日中の思想的交錯』（慶應義塾大学出版会、二〇一六年）、深町英夫『孫文―近代化の岐路』（岩波新書、二〇一六年）、中山義弘『近代の日本人と孫文』（汲古書院、二〇一六年）等を参照。

（6）孫文の九州大学での講演（会場は精神病学教室、座席数約三〇〇）については、速記録などの直接的な資料は現在のところ発見されていないが、幸い地元の『福岡日日新聞』（いまの西日本新聞の前身）三月二十日の第三面に「孫氏の講演と歓迎」と題した記事が残されている。その記事に拠れば、建国間もない中華民国のこれからの発展には「科学の力」が不可欠であること、そしてその導入にはアジアの先進国である日本との親密な関係を結ぶことが重要であり、両国の親密な関係構築のためには「学術」と「思想」における交流が最も大切であって、社会のオピニオンリーダーとしての大学の教授陣に対して、かつ今まさに将来の教授たらんと勉学中の学生諸君たちに対して大いに期待していることが述べられたようである。政治や経済効果（利益）による国交回復を優先する今日の一般的な風潮を考えると、まことに含蓄のある内容であったように思われる。

（7）つまり、このように解釈することができる。この「学道愛人」の扁額は、『論語』に代表される中国伝統の儒学思想と、博愛（philanthropy）に象徴される西洋のキリスト教的倫理思想、そして西郷隆盛の生きざまを模範とする日本の武士道の精神との融合が目指されたものである、と。

（8）中本静暁『関門・福岡のアインシュタイン―訪日最後の一週間』（新日本教育図書、一九九八年）、杉元賢治・佐藤文隆『アインシュタイン日本で相対論を語る』（講談社、二〇〇一年）、比企寿美子『アインシュタインからの墓碑銘』（出窓社、二〇〇九年）等を参照。

（9）武継平『異文化のなかの郭沫若―日本留学の時代』（九州大学出版会、二〇〇二年）、および同氏「文学者郭沫若と九州の縁」（岩佐昌暲編『中国現代文学と九州―異国・青春・戦争』所収、九州大学出版会・ＫＵＡＲＯ叢書、二〇〇五年）等を参照。

（10）中山平次郎の考古学研究は、岡崎敬校訂による編著『古代乃博多』（九州大学出版会、一九八四年）にまとめられている。

（11）現在中里見教授によって図書として編集・公刊されたもののみを挙げれば、『濱一衛著訳集：中国の戯劇・京劇選』（花書院・九州大学大学院言語文化研究院ＦＬＣ叢書3、二〇一一年）、『濱文庫所蔵唱本目録』（花書院・同上ＦＬＣ叢書11、二〇一五年）がある。このほか論文として幾つかの研究報告が同氏によって発表されている。

（12）鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男―万葉集を訳した銭稲孫の生涯』（東方書店、二〇一四年）参照。銭氏の万葉集抄訳は『漢訳万葉集選』（日本学術振興会刊、一九五九年）として戦後我が国で出版され、巻末に佐佐木信綱、新村出、そして吉川幸次郎の三氏による後語および跋文がある。一方、中国においては、銭氏の門弟である文潔若の編集と補逸、そして曽維徳の注を追加して近年ようやく『万葉集精選・増訂本』（上海書店、二〇一二年）と題して公刊された。

(13) 山根幸夫『東方文化事業の歴史―昭和前期における日中文化交流』(汲古書院、二〇〇五年)、今村与志雄編『橋川時雄の詩文と追憶』(汲古書院、二〇〇六年)等参照。なお、橋川時雄は当時の北京での人脈を駆使して民国期の中国の文化人を網羅した人物辞典『中国文化界人物総鑑』(一九四〇年十月初版。現在は一九八二年に名著普及会より復刻版が出版されている)を刊行している。これも他に類例が無い貴重な歴史資料である。

(14) 岩下明裕『入門 国境学―領土、主権、イデオロギー』(中公新書、二〇一六年)参照。

(15) 山田敬三「魯迅と郭沫若―その九州大学との関係―」(前掲の岩佐昌暲編『中国現代文学と九州―異国・青春・戦争』所収、九州大学出版会・KUARO叢書、二〇〇五年)参照。

〔以下に広島大学の陳狲准教授による本稿の漢訳を付す〕

孫中山的福岡之行及九州大學的日中學術交流

靜永健原著／陳狲華譯

一九一三年(大正二年、中華民國二年)三月十九日,孫中山來到福岡拜訪了創建不久的九州帝國大學醫科大學(今九州大學醫學部)。在參觀校園並舉行演講之後,他又揮毫留下了一幅「學道愛人」的横幅。這副横幅現被懸掛在位於福岡市東區的九州大學附屬圖書館主廳之內,以供師生景仰。横幅筆力遒勁,入紙三分,讓人不禁聯想到了孫中山的堂堂人品。

眺望横幅,不禁想到,孫中山當時是以一種什麽樣的心情來揮毫留書的呢?這幅横幅又蘊含了孫中山試圖留給九大學人的一種什麽樣的期盼呢?就讓我先圍繞着這兩個問題來展開今天的話題吧。

衆所周知,孫中山在各地留下的墨寶之中,最為常見的是「博愛」一語。孫中山生於廣州,十三歲時隨母親來到夏威夷。對於在夏威夷接受教育並長大成人的孫中山來說,「博愛」兩字,乃是代表一種融會貫通了中國傳統儒學及西洋基督教原理之人類最高的德育思想。要之,孫中山之所以鍾愛「博愛」二字,是因為他認為無論何種宗教何種流派,無論何種主義何種思想,「博愛」都是一種可以接受而且必須堅持的基本美德。而在他留給九大的這幅横幅上,我們也可以看到,孫中山寫入了一個「愛」字。

然而,對於居住在九州的日本人來說,在瞻仰這幅横幅之時,自然而然還會聯想到另一位偉大革命家的名字,也就是明治維新之功臣西鄉隆盛(1828 — 1877)。這是因為,西鄉隆盛的遺墨之中,最為膾炙人口的就是「敬天愛人」四字。那麽,孫中山在揮毫墨書之時,是否其心中也曾浮現過這位九州偉人的悲壯身影呢?答案是極有可能的。西鄉隆盛遺著『南洲翁遺訓』中有一則與「學道愛人」思想極為接近的語録,其二十四云:「道乃天地自然之物,人從之以行,當以敬天為目的。因天予我以同一之愛,則當以愛我之心愛人也。」大家都知道,在孫中山的革命隊伍之中,有很多堅定的日本支持者,而其核心人物,又以宮崎滔天(1871 —

1922）最為有名。其實，宮崎滔天之兄宮崎八郎（1851 — 1877），正是在西南戰爭中參加了西鄉軍隊並最終殺身成仁。或許就是宮崎滔天，成為了聯繫孫中山與西鄉隆盛的一條重要紐帶。特別是此次孫中山的九大訪問，乃是其於辛亥革命成功之後最初的日本之行，其對革命成功之後的西鄉隆盛之所作所為的感觸，又可謂是別有一番滋味在心頭了。附帶一句，在訪問九州帝國大學的第二天，孫中山坐火車從福岡來到大牟田，拜訪了宮崎滔天的祖宅。要之，孫中山留給九大的「學道愛人」四個大字中，無疑也蘊含了其對日本革命先驅的種種思念。

談到此處，讓我們換一個話題。下面來看看孔子的語録『論語』。其「陽貨篇」記録了如下之一段軼事：

孔子十大弟子，也就是所謂的「孔門十哲」之中，有一位叫子遊的年輕弟子，被任命為魯國一個小縣武城的長官。有一天，孔子為了視察他的工作來到了武城，迎面傳來了一陣「弦歌之聲」。原來子遊在自己的任地創辦了學校，教人識字頌唱，知書達禮。見此孔子忍不住「莞爾而笑曰：割鷄焉用牛刀」，暗諷子遊創辦學校之舉，對於武城這塊小地方來說，有點小題大作了。然而，聽了孔子的這句話，正直賢良的子遊卻回答道：「昔者偃也，聞諸夫子，曰：君子学則愛人，小人学道則易使也。」

即使是一處窮鄉僻壤，也不可以沒有學校教化。這就是子遊對恩師孔子的回答。聽到子遊的言之有理，孔子也只好托詞於「前言戲之耳」。要之，通過這則故事我們可以確認出，孫中山留給九大「學道愛人」的四個大字，乃是直接來源於『論語．陽貨篇』。

孫中山訪問之時的福岡，還只不過是一個人口不滿十萬的地方都市。或許揮毫寫下「學道愛人」之四字的孫中山的腦海裏，有意無意地將眼前的福岡與出現在『論語』之中的魯國鄉鎮做了一個重疊。然而，要值得一提的是，孫中山並沒有鄙視福岡之意。恰恰相反，如下文所述，正是基於一種對新世界的萬分感觸，他才為剛剛成立不久的九大寫下了這四個寓意深遠的大字。

綜上所述，可見孫中山留給九大「學道愛人」的四個大字，當包含了三重意蘊：一是蘊入了其平生所倡導的萬人博愛之精神；二是包含了對孕育了西鄉隆盛「敬天愛人」精神之九州風土的敬意；其三則是直接將創辦於一九一一年，也就是辛亥革命成功之年的九州帝國大學比喻為「君子」，期待其今後能夠擔負起培育社會棟樑之大業。這幅墨跡，無疑是一幅名副其實的百年九大的寶中之寶。

如果對「學道愛人」之出典的『論語．陽貨篇』再作一番究讀的話，我們或許還可以對揮毫寫下此四字時孫中山胸中的另一番感觸做一些蠡測。與『論語』其他許多篇章一樣，「陽貨篇」中也採用了一種「君子」與「小人」之對比論述的方式，並將「小人」歸結為「易使」，即容易為統治者所驅使。這一「小人」，或許正是從中華民國臨時大總統位置上退下來，以「籌辦全國鐵路全權」之身份來日之孫中山本人的一個自嘲。『論語』篇章諸多，而上提「陽貨篇」乃為數不多之記録了孔子失言的一則，一般來說，揮毫賦志，不會有意去擷録此中語詞。留給九大之橫幅，或也是諸多孫中山題詞中的唯一一幅吧。要之，如果孫中山是以大總統之勝利者的身份來到福岡的話，他當不會故意選用出自「陽貨篇」的這四個字。孫中山在祝福新生九大之時，其胸中當還蘊含着另一番

決意。此後之事，則是衆所周知。結束了日本訪問的孫中山回國之後，立即發動了討伐袁世凱的新戰爭。戰敗數月之後的八月，又被迫再次亡命東瀛。這也就是歷史上所謂的「第二革命」。由此可見，孫中山與新建立的九大有過的這段萍水之緣，放眼至日中史的研究，也是一段不容忽視的歷史。

其實，即使是在日本的國立大學之中，九州大學也可謂是一所歷史悠久的舊帝國大學。不過，由於遠離首都東京，因此無論在辦學的硬環境上還是在研究的軟環境上，都遠遠無法稱得上一流。而且，建校當時的福岡市人口還只是一個只有九萬五千人的小都市。幸運的是，塞翁失馬，由於與諸多著名海外學人的深厚淵源，反而使得九大形成了一種自由開放的獨特學風。

對於百年九大與海外的學術交流史，我在以下將其分之為前後五十年之兩期。在前五十年名垂青史之九大訪問者之中，一九一三年的孫中山訪問之後，還有一九二二年（大正十一年）十二月二十五日愛因斯坦（Albert Einstein，1879 — 1955）的來訪，以及一九五五年（昭和三十年）十二月十七日郭沫若（1892 — 1978）的來訪。這三人的九大訪問，雖然不乏有很多偶然因素，然而卻具有一個共同點：與以首都東京及日本傳統文化之中心關西地區不同，這三人的訪問，均是由私淑友情直接促成的。

愛因斯坦的九大訪問，是由與愛因斯坦友情深篤的日本第一個相對論理解者九州帝國大學工科大學桑木彧雄（1878 — 1945）（今九州大學工學部）教授、日本內置外科手術的開拓者九州帝國大學醫科大學三宅速（1866 — 1945）教授一手促成的。而郭沫若，則曾於一九一八年（大正七年）九月至一九二三年（大正十二年）三月在九州帝國大學醫科大學求學，其間因恩師中山平次郎（1871 — 1956，醫科大學教授・病理學）之啟蒙，啟發了其對考古學、中國古代史學的興趣而成為一代史學宗師。這段因緣，也是其戰後以中國科學院訪日學術視察團團長之身份重返九大的最為重要的機緣之一。另外，上面所提到的孫中山之一九一三年的來訪，除了密友宮崎滔天的盛情邀請之外，還與和孫中山交流密切的長崎貿易商人梅屋庄吉（1868 — 1934）、福岡企業家安川敬一郎（1849 — 1934）等人的鼎力相助是分不開的。

除了著名學者的九大來訪，早期的九州大學與中國的文化交流活動之中，還有兩位先驅者的名字不可埋沒。一位是當時的法文學部（現文學部）首任中國文學講座主任教授目加田誠先生（1904 — 1994），還有一位是目加田先生的摯友、九州大學教養部教授濱一衛（1909 — 1984）先生。兩位先生曾於三十年代初期赴北京留學，與當時在京的中國著名知識分子留下了不少抒寫友誼的篇章。

濱一衛先生在北京留學期間主要將精力放在了傳統京劇的研究之上。回國之後，他留下了開啟日本中國戲曲研究之先河的兩部大著『北平的中國戲』（一九三六年，東京・秋豊園）與『支那芝居之話』（一九四四年，東京・弘文堂）。此外，濱一衛先生在北京留學期間還着意收集了一大批完整的觀劇資料，現在被匯總收藏在九州大學附屬圖書館「濱文庫」中。對於濱一衛先生的研究成果及其留下來的資料之整理與分析，九州大學言語文化研究院中里見敬教授致力頗深，不久之後，我們將會看到中里見先生之研

究成果的問世。

而目加田誠先生，則是戰後重建日本中國文學研究的功勳者之一，其研究領域涵括了詩經、唐詩以及文學理論等方方面面。目加田誠先生於一九三三年（昭和八年）十月至一九三五年（昭和十年）二月赴北京留學。赴北京時目加田誠先生正值三十而立之年，剛剛被任命為九州帝國大學助教授。

有關目加田誠先生北京留學情況，雖然在先生晚年所發表的一些隨筆之中得以管見片斷，然不明瞭之處甚多。最近，先生的藏書以及筆記被後人寄贈給了大野城市。從這些書籍之中，我們發現了一部目加田誠先生親筆所記的『北平日記』，由此才看到了先生於北平留學時的全貌。從日記可以看出，先生與魯迅（1881 — 1936）的弟弟作家周作人（1885 — 1967）、日本文學研究大家『萬葉集』之譯者錢稻孫（1887 — 1966）等人均交情匪淺。比如「昭和九年（一九三四）九月二十五日」條記晚間事云：

夜，西四，於同和居宴會。東京研究所諸同仁、錢稻孫氏、周作人、楊樹達、鄭穎孫、傅惜華、徐鴻宝、楊鍾羲之長子、其他諸人及橋川時雄、小竹武夫、高岡等氏。一次愉快的會合。

又，「昭和九年十二月八日」記云：

朝，買砂紙磨滑冰靴，又讀『小山詞』。下午……從錢稻孫氏聽講『紅樓夢』『儒林外史』中用語。傍晚，去北海。周豐一（靜永注：周作人長子）、濱一衛、小川環樹諸君在，滑冰，三十分鐘左右。

夜，被招至周君八道灣家中，入浴，吃壽喜燒，聽唱片，有『明烏』『朝顔日記』等歌。頓起思日本之情。

又，「昭和十年一月二十三日」條記云：

上午，去中國大學，取剩下的印刷資料。去理髮室。夜，蒙錢稻孫氏、周作人、徐祖正、朱自清等厚意，招我等留學生聚會，吃壽喜燒。

以上僅選取『北平日記』中三則記載，即可看出當時日中學人交往之歡。目加田先生的這部『北平日記』，無疑是一部記録當時日本留學生在北京的日常生活、與在京中國學人之交流的貴重的歷史資料。

還要注意的是，日記所記時期，正值柳条湖事件（一九三一年九月十八日）與盧溝橋事件（一九三七年七月七日）之間，並非日中關係友好之期。或許正是這一敏感時期，才導致親日派知識分子與北京的日本留學生之間交流頻繁。從此角度出發，目加田先生的這部日記，無疑還是我們分析這一時期北京親日派學人之思想動向的貴重文獻。這部重要的歷史記録，現在由我所在的九州大學文學部中國文學研究室進行整理和註釋，準備出版公開。同時，我們還準備將其翻譯成中文在中國也予以公開出版。

中國有句古話云「天時地利人和」，九州帝國大學，也就是現在的九州大學，其誕生之初的一九一一年乃是一個風雲突變的時代，特別是日中關係，遠稱不上為天所佑的程度。而其所在地之福岡又遠離首都圈和關西經濟圈，更談不上地利，且其由於距離中

國和朝鮮最近，又最容易為其時各國政治和社會局勢所影響。然而，正是在這種談不上天時地利的情況之下，九州大學的學術水準，由於學人之間的真誠牢固的友誼，卻得到了迅速的發展。這也正印證了上述古語來源之孟子的原文：「天時不如地利，地利不如人和。」要之，不輕易為國際政治或眼前經濟局勢所迷惑，清淡如水一般的學人之間的「君子之交」，才是促進兩國人民的真正的相互理解，名垂青史之最重要的源泉動力。由一九一三年孫中山訪問九大而揭開的日中學術交流之序幕，此後歷經百年風雨，正如「學道愛人」這一題詞所云，給九州大學的帶來了無法估量的恩惠與活力。

最後，讓我披露一則由九大先人所策劃，卻沒有實現的日中學術交流軼事。這是一個有關九大招聘在上文提到的周作人之兄魯迅的故事。當時，有一位叫增田涉（1903 — 1977）的日本學者，其跟魯迅有着私淑之誼，曾獨身到上海接受魯迅熏陶。在他的回憶録之『魯迅的印象』（角川選書，一九七〇年增訂版）的第二六二頁中，寫道一九三一年其曾向魯迅提到九州大學中國文學研究教員缺員一事，並直接向魯迅詢問是否有意赴任九大講師一職。當時魯迅回答以一年為期可接受聘任，增田涉立即向日本方面傳達了魯迅這一意願。此事之結果大家都不難推測——魯迅並沒有擔任過九大教職。至於魯迅未能赴任的原因，由於增田涉並無提及，現在也就不得而知了。然而每每想起此事，我不禁在腦海中作一番夢想：如果當時魯迅如期來到九州大學講學，九州大學乃至日本整個學術界，或許又是另一番氣象了！

〈了〉

本研究は JSPS 科研費 15H03194 の助成を受けたものです。
This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number15H03194.